慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハイエク転換問題についての一考察 : 複合的方法による実証主義の内在的批判
Sub Title	Evolution of Hayek's transformation : from positivism to compositive method
Author	西村, 崇(Nishimura, Takashi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2002
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.95, No.2 (2002. 7) ,p.419(229)- 442(252)
JaLC DOI	10.14991/001.20020701-0229
Abstract	ハイエクの経済学方法論の解明が目標である。まず、実証主義の起源と類型を整理し、論理実証主義と経済学の関わりを扱う。さらに、ポパーの反証可能性の議論とゼロ方法を再考察し、否定主義的方法論を明らかにする。そして、「ハイエク転換問題」を取り上げ、ハイエクの「複合的方法」を扱う。科学的方法論（認識論でなく）における「仮説の先験性」という共通性から眺めれば、実証主義批判として、ハイエクこそがポパーを補完するという可能性が示される。 This study explicates Hayek's economics methodology. First, it clarifies the origin of positivism and its types and treats the relationship between logical positivism and economics. Furthermore, it reconsiders Popper's argument of the possibility of falsification and zero method and clarifies the negativistic methodology. In addition, this study considers "Hayek's transformation problem"and deals with his "composite method." From the common perspective of "transcendentality of hypothesis" in scientific methodology (not epistemology), this study demonstrates a possibility that Hayek complements Popper as the criticism of positivism.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20020701-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハイエク転換問題についての一考察 ： 複合的方法による実証主義の内在的批判
Evolution of Hayek's Transformation：From Positivism to Compositive Method

西村 崇(Takashi Nishimura)

ハイエクの経済学方法論の解明が目標である。まず、実証主義の起源と類型を整理し、論理実証主義と経済学の関わりを扱う。さらに、ポパーの反証可能性の議論とゼロ方法を再考察し、否定主義的方法論を明らかにする。そして、「ハイエク転換問題」を取り上げ、ハイエクの「複合的方法」を扱う。科学的方法論（認識論でなく）における「仮説の先験性」という共通性から眺めれば、実証主義批判として、ハイエクこそがポパーを補完するという可能性が示される。

Abstract
This study explicates Hayek's economics methodology. First, it clarifies the origin of positivism and its types and treats the relationship between logical positivism and economics. Furthermore, it reconsiders Popper's argument of the possibility of falsification and zero method and clarifies the negativistic methodology. In addition, this study considers "Hayek's transformation problem" and deals with his "composite method." From the common perspective of "transcendentality of hypothesis" in scientific methodology (not epistemology), this study demonstrates a possibility that Hayek complements Popper as the criticism of positivism.

「三田学会雑誌」95巻2号（2002年7月）

ハイエク転換問題についての一考察：複合的方法による実証主義の内在的批判*

西村　崇

要　旨

ハイエクの経済学方法論の解明が目標である。まず，実証主義の起源と類型を整理し，論理実証主義と経済学の関わりを扱う。さらに，ポパーの反証可能性の議論とゼロ方法を再考察し，否定主義的方法論を明らかにする。そして，「ハイエク転換問題」を取り上げ，ハイエクの「複合的方法」を扱う。科学的方法論（認識論ではなく）における「仮説の先験性」という共通性から眺めれば，実証主義批判として，ハイエクこそがポパーを補完するという可能性が示される。

キーワード

経済学方法論，ハイエク，ポパー，実証主義，反証可能性

I．序：トレンドとしてのハイエク

経済学は，観察対象となる社会現象へ数学的定式化を適用することにより，急激にその姿を科学として現し，社会科学において独特な発展を遂げてきた。しかしながら，このような発展の帰結こそが，予期せぬ心理的な圧力となり，経済学者を落胆させているかもしれない。高度な数学や計量モデルにより観察する現象を記述しているにもかかわらず，自然科学と同程度の精度ある予測に，経済学はなかなか成功しない。かつてマルクス主義が真摯に向き合った問題でもある，理論と現実の架橋しがたいギャップは，経済学一般にとっていまだ見落とすことのできないものである。もっとも，楽観的な立場をとり，単純明瞭な事実を，古臭い神学的または形而上学的な概念ではないものを，つまりデータという数量化された事実を体系的に取り込む能力を，自然科学と共有すると強調し，高度に実証主義的な科学として，経済学を賞賛し続けることも可能であろう。しかし，完全な予言を可能とする法則言明を求めて，経済学はいまだに苦悶し続けているという，悲観的に映る

＊　本稿は，セミナー「経済の数理解析」（数理経済学研究センター主催2001年7月）における，「実証主義の内在的批判：ハイエクの複合的方法」という題目での講演内容に，加筆修正したものである。この報告の機会を与えていただいた丸山徹教授に，また，草稿への有益なコメントを下さった飯田裕康教授と池田幸弘助教授に対して，改めて感謝の意を表したい。

現実もある。

そもそも問題となるのは，実証主義としての経済学のありかたであり，それを多少なりとも解明できないであろうか。このような経済学方法論への反省的思索を試みることは，全く唐突なものではない。例えば，「複雑系」の議論への一般的な関心の高まりとともに，従来の厳密な予測中心型から，経済学のあり方を解放しようという試みもあり，そこで注目を集めているのが，フリードリッヒ・ハイエク（1899-1992）が行った，経済学方法論に関する諸考察である。実際に，複雑系の議論の学説史的な位置付けと評価が，最近に試みられ，従来では中心的な役割を果たした，一般均衡理論の提唱者ワルラスの評価が下がり，複雑系の議論への適用可能性の観点から，ハイエクの評価が相対的に上がっている報告もある。(1)

ハイエクが行った経済学方法論に関する知的探求は，より応用可能性を持つものとして，今日のトレンドとして受けとめられてきている。従来では，ハイエクが政治思想的観点から独特に主張した，「自生的秩序論」に注目が集まり，この観点を中心に，ハイエクへの研究が営まれてきた。そこで，より経済学方法論に焦点を絞った議論として，ハイエクとその盟友であるカール・ポパー（1902-1994）が同時期に提示したが，それほどに注目されなかった，「複合的方法（compositive method）」を，(2) 実証主義（positivism）への内在的批判として取り上げる。(3) 議論の枠組みとして，実証主義の起源と類型を整理し，具体的には論理実証主義と経済学の関わりを扱う。さらに，この実証主義を乗り越えようとした，ポパーの科学的方法論を取り上げ，ハイエクとポパーの関係をめぐる「ハイエク転換問題」という，近年の論争に位置付け，複合的方法という斬新な用語で，ポパーとハイエクが意味したところを明らかにする。複合的方法への考察こそが，経済学方法論としての実証主義が抱えむ諸問題点を明確にし，それらの克服への糸口を提供してくれる。

（1） この北米でのコンファレンスの報告論文集として，Colander［2000］と，特に Wible［2000］36 の図表を参照。

（2） 本稿では，compositive method の訳語として，ポパーの『歴史主義の貧困』（Popper［1957］）の邦訳に従って，「複合的方法」を用いた。この用語は，ハイエクの『科学における反革命』（Hayek［1952］）では，「構成的方法」と訳されている。本稿での訳語の選択の理由は，実証主義への批判的考察として，経済学の理論構成における複数の非還元的に独立した要素の総合的な組み立てを明確にするには，訳語として前者の方が便利と判断されたからである。

（3） 複合的方法は，オーストリア学派の現代的主要人物であるハイエクにより『科学における反革命』において，コントを中心とした実証主義批判の文脈で用いられた。最近このような課題は，『実証主義を超えて』（Caldwell［1982］）において，コールドウェルにより取り組まれ，いわゆる主流派経済学における実証主義的な方法論的側面が，批判的に検討された。その際にコールドウェルは，「方法論的多元主義（methodological pluralism）」なるものを提唱し，競合する多様な経済学方法論を平等に扱うべきと主張した。しかしながら，もしこの主張が，方法論的考察の結論というよりも，学問態度への規約的な主張であるならば，実証主義の「外在的」な批判に帰してしまうであろう。残された課題として，従来では積極的な意味で触れられなかった，ハイエクの複合的方法こそを，実証主義の内在的批判として読み直す必要が生じてくる。

II．実証主義の起源と類型

実証主義とは，神学的または形而上学的概念を，社会現象の説明から排除する，学問上の運動としてまとめられよう。このような哲学的な試みは，産業技術の進歩と並行して，自然科学が急速に発展した19世紀のヨーロッパに，その姿を現してきた。実証主義の提唱人物としては，オーギュスト・コント（1798-1857）とJ. S. ミル（1806-73）があげられよう。共通の課題は，あくまでも「科学的」に社会現象を説明することにあり，その目的にかなう哲学的基盤を明確にすることにあった。それは，観察可能な事実に基づいた，社会現象の説明方法の獲得であり，神の恩寵の顕示という神学的な目的論や，事物の究極的本質という形而上学的概念の排除が，同一の知的目標とされた。

ミルが，その大著『論理学』に象徴されるように，論理学における考察に基づいて，自然科学と社会科学に共通する，科学的な考察方法の解明を目指したならば，コントは，自然科学の方法の社会科学への適用に，熱心であった。当時成功を収めつつあった，生物学の方法から類推して，有機体論的（holistic）な立場を，コントは強く採用した。身体の各器官が，身体という全体に関連付けて，その機能的な意味を持つように，個人もしくは社会の個々の部分も，社会という全体に関連付けなければ，観察可能な意味がないという主張である。中世ヨーロッパにおいて，人間と社会に関する全ての事柄が，体系的に神学により網羅されたように，コントの野心的課題は，新たな産業社会において，観察対象を，個々ばらばらにではなく，全体に意味付けた，社会や人間の目的や秩序の，高度に包括的な説明であった。革命以降も周期的にめまぐるしく，フランスでは政治体制が変わり，それゆえに，社会の進む方向を，人間の知的能力により見極めることが，コントにとって急務であった。その主張の意味や目的に，多少の違いはあるものの，ミルとコントともに，神学的な概念による社会の説明から脱却し，新しい時代にふさわしい，総合科学としての学問の方法を探したというのが，19世紀の古典的な実証主義の大意であろう。(4)

続く世紀において，実証主義は，より科学的なる説明を目指して，形而上学的概念の排除を徹底させていく。哲学的運動としての実証主義は，1920･30年代のウィーンに，「論理実証主義」という標語で知られる知的サークルの間に，その姿を現した。このウィーン学団と呼ばれる知的集団の主要メンバーは，数学や物理学の一流の知識を持ち，なおかつ哲学者でもあり，科学の優越性を信じて，形而上学的概念の濫用を忌み嫌い，それらを芸術や文芸活動の領域に制限しようと試みた。社会現象の説明に，あくまでも科学的な活動としてのみ興味を持ち，数学と論理に基づいた科学的認識のための，統一原理を探求する知的運動であった。

（4） 19世紀の古典的実証主義の説明には，Hughes［1958］chap. 2（邦訳）第二章を，また特にコントに関するものは，Wernick［2001］chap. 4を参照。

論理実証主義が登場した背景には，やはりオーストリアの，特にドイツと比較した場合の，特殊な事情があった。ドイツの観念論的哲学が，例えばヘーゲルの『法の哲学』のように，一見すると抽象的な議論でありながら，何らかの形で具体的な政治状況に，知的関心を寄せていたのと比較すると，オーストリアの政治状況は，ドイツ統一の主導権を失い，ハンガリーとの二重帝国という脆弱なものでありつつも，権威主義的な王朝体制からの世俗化という，政治的自由主義が急進し，実に入り組んだものであった。そして，社会主義運動が急成長するなか，第一次世界大戦の敗戦とともに共和制に移行し，歴史的にも慌ただしかった。ウィーン学団のメンバーたちは，現実の混沌とした政治状況への，同様に，ドイツの形而上学への徹底した無関心を示し，自らの主張する科学的な原理のみを，信頼に値するものとした。(5)

論理実証主義者たちが提唱したもので，最も特徴あるものは，「検証（verification）」という科学的方法論である。科学に関する厳密な基準が要求され，肯定的な証拠として経験的な事実に言及可能な言明のみが，「科学的に意味がある」と主張された。宗教または倫理的な言明や，感情表現などの詩的言語は，経験的な事実により検証不可能であり，論理実証主義が要求する，科学的な客観性を満たせず，「科学的に意味がない」ものとされた。論理実証主義者は，日常的表現を含めた多種多様な言明を，論理という人工的な抽象言語により意味論的に分析し，自らが掲げる論理実証主義の基準に従って，科学的な意味の有無へと二分することを，科学的な知的探求として方法論上優先する，根本的な作業と見なした。(6)

III．経済学と実証主義

論理実証主義者たちが宣言した検証主義は，社会科学における方法論的な原理・原則に不満を感じる者には，実に魅力的なものと響いたであろう。特に経済学においては，テレンス・ハチスン（1912-）がこの検証主義に着目し，当時の経済学が過度に演繹的な理論体系となり（ハチソンはライオネル・ロビンズの批判を念頭においていた），経験的証拠による理論の正当化という，科学的なテストを拒否している点を強く攻撃した。ハチソンの中心的な主張とは，論理実証主義者と同様に，数学と論理学のみが演繹的な科学であり，経験的にテスト可能な言明によって，その他の科学は構成されるべきというものであった。そしてハチソンは，『経済学理論の意義と基本的公準』（1938

（5） 論理実証主義の登場した社会思想的な背景としては，Smith［1987］を参照。同文献において，具体的な背景として挙げられているものは，ウィーン学団のリーダーであるモリッツ・シュリックの前任者として，ウィーン大学の帰納科学の哲学教授を務めたエルンスト・マッハの先駆的な影響力，学団のメンバーとは見なされないものの，哲学者フランツ・ブレンターノの存在，そして，オーストリア学派の創始者カール・メンガーと，その経済学方法論の影響である。

（6） 論理実証主義の方法論に関しては，Caldwell［1982］chap. 2-3（邦訳）第二・三章を参照。

年）において，論理実証主義の経済学への適用という，先駆的な試みを行った。

ハチソンが経済学の目標としたものは，自然科学と同様の，理論モデルに対する経験的なテストであり，それを可能にする経済学方法論として，論理実証主義の厳密な導入である。経済学における基本的公準が，論理実証主義によって再定式されない限り，経済学は科学的であるとは見なせず，厳密な予言を可能とした物理学の方法を模範とすることに，ハチソンの興味があった。(7) 自然科学の中でも物理学はその特徴として，観察事実を証拠とする，法則言明を積極的に肯定する実験が，比較的容易である。また，関連する初期条件を法則言明に適用することにより，予測言明を導き出すこともできる。もしハチソンの試みが成功していたならば，経済学の根本原理は，物理学と同様に，法則言明にて構成され，観察対象は，経済学に関連性のある事実へと還元され，それらを初期条件とした法則言明により，未来の事象に関する予言が可能となり，経済学は高度な予測を遂行する科学として，賞賛とともに再登場したであろう。

ハチソンが1930年代に行った，経済学と科学哲学の結び付けは，今日にトレンドとして，経済学方法論の議論を定着させることになった，先駆的業績として評価される。しかしながら，期待したほどに経済学が予言を提供するようになった訳ではなく，論理実証主義の導入には，それほどの成果を収めることができなかった印象がある。論理実証主義を，より厳密に経済学に適用しようとすれば，逆説的に，その要求にかなう経済学原理は，ますます見当たらず，ハチソンの議論が暗示するように，厳密な適用の結果かろうじて残りうるものはただ一つ，貨幣数量説だけであった。

ハチソンの目的は，経済学における，経験科学としての基礎を見出すことにあった。そこで，経済学を純粋理論と応用理論に分け，純粋理論としての貨幣数量説は，経験的内容を欠くが，応用理論として現実に適用することにより，その経験的内容を獲得すると，経済学における経験的事実の基礎付け方を説明した。(8) しかしながら，実際に貨幣数量説に基づいた予測で，検証された事例などはなく，この数式が検証主義の要求にかなう理由は，それ程に明確に述べられてはない。この方程式（$MV=PT$）は，論理実証主義から見れば，経済学の中では比較的に経験科学的な言明かもし

（7） Hutchison［1938］23-24, 161

（8） Hutchison［1938］27-33。この著作に関連する二点に触れると，まず，一般均衡理論に見られるような，「行為者の完全予見性」や，「他の条件に変化が無ければ（ceteris paribus）」という理論上の但し書きや，全ての市場参加者における「均衡への傾向」という想定は，経験的に検証できないがゆえに，あくまで経済学理論の補助仮定としてのみ受け入れるべきと，ハチソンが主張している点である。ハチソンは，論理実証主義の導入を試みたが，これらの仮定や想定を検証不可能と拒否してはなく，あくまでも経済学にとって必要な補助仮定として承認した（Hutchison［1938］161-162）。第二点として，1934年に出版されたポパーの『探求の論理』に触れ，ハチソンは「反証」という言葉を使うが，ポパーのそれとは区別されるべきである。決定的な違いは，ハチソンは，あくまで論理実証主義者として，経験的事実による理論の検証の方法に興味を示すが，ポパーは，このような帰納法への批判として，反証可能性を提唱したことである（Popper［1957］137-138（邦訳）207-208ページ）。

れない。しかし，貨幣量や価格や取引量という，数量化された明瞭な経験的事実に，この方程式が言及可能な点のみが理由となるならば，経済学は現実の問題に対し，それほどに期待した内容を伴わないであろう。数量説が含意する与件の解釈こそが，いまだに論争となる。それは，中央銀行による貨幣量の増加はインフレーションのみに帰結する主張と，そうではなく新規投資を刺戟し物価上昇よりも生産・取引量を増加させるという主張との対立である。ゆえに，経験科学としての経済学の基礎として，ハチソンが暗黙に想定するのは，検証を可能とする諸変数の計測可能性であろう。(9) 敷衍すれば，貨幣数量説は，完全に検証されたわけではなく，法則言明として常に妥当せず，厳密な予言を提供しないが，経済学理論の中では，著しく検証可能性を備えたものであるということになろう。

経済学への論理実証主義の導入は，実証主義の適用の全面的な受け入れよりも，理論と現実のバランスを求めた結果として，「弱い実証主義」とも呼ばれるべきものを，経済学にもたらした。弱い実証主義とは，経験的に特定しやすい明瞭な事実に，理論の仮定や想定が言及してさえいれば，たとえ普遍法則に基づいた，完全な予言に失敗しても，実証的な分析として，理論自体は受け入れ可能と，定義できよう。表裏一体にあるのが，一般に意味されるところの，「規範的（normative)」分析である。予言に失敗するのは，経済学の法則論的な言明にではなく，観察対象としている社会現象に起因するものであり，ゆえに，法則言明により記述されるモデル的社会を，現実に対する一つの理想ないし規範的な状態と見なすことである。理論と観察対象の緊張的な対立関係を，実証・規範という二区分法によって弱めることにより，完全な予言を追求する「強い実証主義」を，経済学が放棄することがようやく可能となった。

Ⅳ．ポパー：実証主義（positivism）と否定主義（negativism）

論理実証主義を導入しても，経済学は期待したほどに科学的にならなかったように，社会科学への科学的方法論の一般化は，無意味なものであろうか。科学哲学者のカール・ポパーも，この種の問題を取り上げた。経済学への論理実証主義の適用が，強い実証主義を，完全な予言を可能とする法則言明の探求を，放棄するという否定的な結末によって，予言の過度なプレッシャーから，せいぜい経済学を解放し得たのに対し，ポパーが批判的に考察したものは，自然科学の方法を単純に社会科学に適用し，完全な予言を追求する，そもそもの態度であった。ポパーをウィーン学団のメンバーと見なすこともできるし，彼の哲学的なバックグラウンドは，論理実証主義から強く影響を受

（9） その二年前に出版されたケインズの『一般理論』に，ハチソンの著書は触れているが，検証主義的な方法論的考察に，その関心は向けられている。経済学の根本問題が，論理実証主義の導入による解決よりも，やはり奥深いものであることを，その後の20世紀後半に先鋭化した，マネタリストとケインジアンの対立が，示唆しているように思われる。

けたものである。しかし，ポパーは周知のように，検証主義という基準に拠った，科学的意味・無意味という区分よりは，科学的な知的探求方法への解釈として，「反証（falsification）」という考え方を提唱した。

ポパーの反証可能性の議論に関しては，多くのことが述べられてきた。実証主義との関連で考察すると，次のような二つの含意が，さらに明らかにされるべきである。第一点は，経験的事実に対するネガティヴ・アプローチというべきものが明らかにする，検証主義の全体論へのコミットの可能性であり，第二点は，全ての反証可能性を備えた言明が，特定の個体に関する予言を可能とする法則言明ではないことである。

第一の含意であるが，一見すると批判しているはずの，有機体説ないし全体論（holism）にコミットしうる点で，意図に反して抱えざるを得ない危険性が，検証主義にはありうる。この点が明らかになれば，19世紀の古典的実証主義と20世紀の新しい実証主義には，重要な共通した側面があることになる。検証主義は，主張や命題を論理的に単純な言明へと解体し，それら個々の厳密な扱いから出発しており，実に原子論的（atomistic）な手続きに基づいているように見える。しかし，その方法論が実質的に要求するところを，今一度注意深く見ると，別の様相を帯びてくる。

反証可能性の議論に関する通常の説明を手がかりとすると，「全ての白鳥は白い」という言明は，経験的事実により真偽を反証することが可能な点で，科学的な言明として見なされる。それはこの言明が，肯定的（positive）な事実によって，つまり白い白鳥の存在という証拠で，検証可能であるからではなく，例えば黒い白鳥の発見という，否定的（negative）な事実によって，反証される可能性を備えているからである。[10] このような，経験的事実に関するネガティヴ・アプローチと呼ぶべきものから眺めれば，検証主義者が，逆説的に全体論的な観点にコミットし，実際には，方法論上の困難な課題を自らに課していることが，浮かび上がってくる。[11]

検証主義の全体論へのコミットの可能性は，哲学的影響においてポパーが畏敬した，アルフレッド・タルスキ（1901-1983）の論理言明の真理値に関する考察結果の助けによって，簡単に明確となる。[12]「命題 p は真である」と「命題 p は真であると認識されている」とは，非常に似通っているが，命題文の「真」という概念において，異なるレヴェルに属していることを，タルスキは意味論的に解明した。[13] この違いを検証主義の方法論に当てはめると，「全ての白鳥は白い」と，「およそ全ての白鳥は白であると検証されている」という言明は，真理概念の異なるレヴェルに位置することが，

---

(10)　この経験的事実に対する，ポジティヴなアプローチとネガティヴなものについては，本稿の注(50)を参照。

(11)　検証主義が方法論的全体論にコミットしていると，ポパー自身が明確に述べているわけではないが，帰納法的検証による理論の究極的正当化は困難であると，強調している（Popper［1957］137（邦訳）207-208ページ）。

(12)　ポパー自身のタルスキに関する解釈と評価は，Popper［1972b］を参照。

より明らになる。前者が真であれば，後者は真となりうるが，しかし，後者が真であることを理由として，前者を真とすることは出来ず，両者は必要十分な関係でない。

つまり，検証主義者は，自らの要求に従えば，言明を科学的と正当化するために，関連する全ての事実を，地上に存在する全ての白鳥に関する事実を，集めなければならない。これに対して，反証可能性の議論は，非常に楽観的な立場となる。反証とは，言明の真偽を，肯定的な事実を証拠として，実証的（positive）に正当化することに興味は無く，科学的な言明を，反証可能性を満たすものとして扱い，否定的な事実である反証例（例えば黒い白鳥）が発見される日まで，暫定的に有効なものとして，受け入れることに興味がある。帰納法としての論理実証主義の成立の困難さは，従来から指摘されているが，原子論的な見かけにもかかわらず，逆説的に全体論にコミットしうる点こそが，実証主義の内在的批判として，強調されるべきとなる。

実証主義批判としての，反証可能性の議論が明らかにする，二番目の含意とは，科学的な言明は，法則論的言明というよりも，「仮説（hypothesis）」として捉えるべきであり，そのような仮説の全てが，関連する初期条件を適用すれば自動的に予言を導き出す，法則言明ではないことである。予言のプレシャーから，社会科学が解放される可能性を，ポパーは積極的な意味で示す。

この試みは，『歴史主義の貧困』（1957年）において，すでに明確に現れてきている。ポパーが批判するのは，科学性の根拠として将来の事象の予言というものに，社会科学の一部が過度に取り付かれているにもかかわらず，それらが反証可能性の要求を満していない点である。科学的であることを，予言可能であることから区別して，全ての科学的な言明が，特定の個体に関する未来の状況に関して，予言を可能としたものではないことを，生物学における進化論を使って，ポパーは次のように明快に説明する。

> ［進化論の］仮説とは普遍的な法則ではない……。それは次のような歴史的な，「チャールズ・ダーウィンとフランシス・ゴールトンは共通の祖父をもっていた」，と同じ性格を持っている。……すべての自然法則が仮説であるという事実は，あらゆる仮説が法則であるわけではない事実から……注意をそらせてはならない。(14)

変態しつつある一匹の毛虫をどれほど注意深く観察してもそれが蝶々に転化することを予測す

---

(13) Tarski［1952］13-20。このような区別は，「無条件な意味における判明な事柄」という意味と，「われわれにとっての判明な事柄」という意味の区別を強調した，アリストテレスにも，この区別を一貫して行ったかは別として，その萌芽があったといえる（アリストテレス，（邦訳）21ページ）。オーストリア学派の経済学方法論とアリストテレスの本質主義との関わりに，これは新たな視点と今後なりうる。

(14) Popper［1957］107（邦訳）161ページ

る助けとはならないであろう。[15]

進化論においては，個体に関する予言の可能性が，厳しく否定される。進化論は，経験的事実としての反証例によって，反証される可能性を満たした命題でありながら，特定の個体に対する予言を提示せず，法則言明ではないものの代表例である。特定の毛虫の変態に関する予言不可能性は，毛虫が蝶へと変態することを主張する言明の，仮説としての反証可能性を，全く弱めるものではない。この言明を否定するためには，反証例が，蝶以外に変態している毛虫の発見が，必要とされるだけである。

予言や予測に関する，一見すると消極的であるこのような態度は，未来に対する科学的な思索や探求の範囲を，必ずしも狭めるものではない。ポパーが慎重に区別するものは，観察対象となる集団において見えるトレンドと，社会全体を個体として扱う全体論的な予言である。[16] ポパーの毛虫の比喩を真似て敷衍すると，例えば，毛虫の摂取食料量や，生息に関する温度や光の量といった，環境条件等を考慮して，毛虫が蝶へと変態する時期のトレンドを統計的に調べ，客観性ある科学的なアプローチとすることは可能である。異なる環境条件下の毛虫のグループ同士を比較することにより，変態への時期に影響する新たな要因の発見も可能である。慎重に扱われるべきは，経済学における絶対価格と相対価格の区別と同様に，トレンドとは，個体レヴェルに起きた変化の結果であって，その原因ではないことである。トレンドに関する新たな発見は，あくまでも，トレンドに関する考察のみに役立ち，特定の毛虫の変態の予言を助けず，普遍法則を導くものではない。[17] トレンドに関する言明と，個体に関する予言を提示する普遍法則とは，非常に似通ったものであるが，混同されるべきではない。

ポパーがさらに主張するのは，そのような集計量に関する研究のみが，社会科学に残された道ではないことである。検証という手続きにより言明を科学的として正当化する，論理実証主義の方法論をポパーは否定し，自らの反証可能性の議論で，それを乗り越えようとするが，両者には共通した知的野心があり，社会科学と自然科学を包括する，統一した方法論のための哲学的基盤を明確にすることであった。ゆえに，社会科学のために，特に経済学のために，次のような「ゼロ方法(zero method)」と呼ばれるものを，ポパーは提唱する。

---

(15) Popper [1957] 109（邦訳）164ページ

(16) Popper [1957] 115-116, 126-128（邦訳）174-175ページ189-191ページ

(17) この議論の発展は，ポパーの後期の著作にも見ることができる（Popper [1972a]）。ポパーの比喩を使えば，個々の毛虫の変態の時期は，精密な時計の動きのように予言することはできないが，気象学における雲の動きのように，集団における変態のトレンドとして，考察することが可能である。

「ゼロ方法」というのは，介在する諸個人がすべてまったき合理性を持つという仮定（そしておそらく，十全な情報を持つという仮定）の上にモデルを構築して，人々の現実の行動がそのモデルの行動からどれほど偏差するかを一種のゼロ座標として後者を用いながら評価する方法のことを意味している。[18]

当然に，モデルにおいて理想的に描かれた人間の行為は，現実において観察されるものと異なる。しかしながら，合理性の仮定の上に記述された状態からの，現実に観察される対象の逸脱の観測は，ポパーは意義があるとする。社会現象に関するモデルが，多少の逸脱した結果を提示して，完全な予言の提供に失敗しても，モデルを構築して経験的事実に照らし合わせること自体は，有益な科学的な営みとして，承認されるべきとなる。

問題となるのが，このゼロ方法に関する説明の解釈である。これは，逸脱した観察事実が発見されるという認識判断と，その理論の社会現象の説明としての有意義性を否定するという価値判断は，レヴェルの異なるものであり，反証例によって，その理論の主要仮定とするものまでを，性急に否定する必要はないという主張になるであろう。ところが，仮に，後者の判断が前者のそれを優先するとなれば，学問分野固有の単なる選択の問題として，理論の諸前提や諸仮定が扱われるようになる。このような方法論的主張は，ポパーの意図に反して，「規約主義（conventionalism）」として解釈され得よう。実際にポパーは，フランスの科学者であるデュエムやポアンカレに対して，帰納法的方法論を否定した点で，同時に，デカルトのような自明性やカントのような先験性に，根本原理の真理性を訴える方法論を否定した点で，先駆者的な高い評価を下したが，彼らの方法論上の規約主義に対しては，徹底して否定的であった。[19] このような解釈の余地が，ゼロ方法が従来それほど注目されなかった，一つの理由として考えられうる。

ポパーの意図に反した解釈の余地に加えて，検証主義者が提示した実証主義的な方法から，ゼロ方法が実質的にどれほど改善されたものであるのかは，それほど明確ではない。ポパーの後年の説明によれば，『歴史主義の貧困』とほぼ並行して完成させた，『開かれた社会とその敵』（1945年）において展開した，「状況の論理（logic of the situation）」と，ゼロ方法は同じものである。[20] 状況の論理とは，社会科学における心理学主義的方法論を検討する文脈において，ポパーが提示したものである。人間行動の法則ないし規則性を，人間本性に関する心理学的な要素（例えば本能）に還元して，それのみで普遍法則論的に説明しようとする立場を，歴史主義的な全体論に意図せずコミッ

---

(18) Popper [1957] 141（邦訳）212-213ページ

(19) Popper [1957] 131-132, fn 2（邦訳）199-200ページの脚注(2)。このような解釈を避けるには，ポパーの述べるところの「仮説主義」の考察が必要と思われる。この点では，本稿の注(32)(33)を参照。

(20) Popper [1976] 117-118（邦訳）下巻32-33ページ

トしていると，ポパーは批判した。[21] 先のゼロ方法についてのポパーの説明と，これを敷衍してまとめれば，人間行動を合理性の仮定の下に記述するモデルは，普遍法則として予言を導かないが，具体的な状況に照らし合わせて，肯定的な経験的内容を獲得させることに，その意義があるということであろう。

ゼロ方法は，ポパーが乗り越えようとした論理実証主義の二つの問題点を，意図せざる全体論へのコミットメントと，科学的言明と法則論的言明の無分別という，強い実証主義が抱え込む二つの困難さを，克服しているように見える。しかしながら，ゼロ方法が意味するものが，社会科学において，モデルは肯定的な経験的事実に触れてさえいれば，それが描く理想状態と，事実としての観測結果との間に逸脱があっても，科学的な考察枠組みとして，それ自体は有益なものであるという，学問分野固有の規約としての主張に帰するならば，弱い実証主義への後退を，これは単に意味しているのかもしれない。理論と現実の関係を，完全な予言によって一元的に結びつける，強い実証主義を放棄する際に，それらの緊張関係を，二元的に実証と規範に区分した弱い実証主義と，ゼロ方法はそれほど違わない可能性がある。

科学的方法論に関する，ポパーの考察の基礎にあるものは，当然に自然科学の方法論であり，社会科学固有の問題の解決までを，必要以上にポパーに期待すべきでない。[22] しかし，経験的な事実に触れてさえいれば，理論が科学的であるならば，学問分野固有の規約はさらに個人固有の選択問題と転化し，まさに「何でもかまわない」ということで，科学哲学者ファイヤアーベントがかつて語ったのと同様に，経済学理論の多元性を主張する，さらに方法論の無政府主義を提唱する立場も現れよう（コールドウェルが提唱した方法論的多元主義は規約主義の一類型であると解釈されうる）。[23] ポパーが提唱したものとポパーが批判したものとの間には，特に弱い実証主義と比べて，どれほど

---

(21) Popper [1950] 282-291（邦訳）下巻88-96ページ。本稿では，邦訳の底本である第二版を用いたが，1966年の最終版との間には，参照部分に関する改定は見られない。同文献の注の最後に記されているポパー自身の説明によると，『開かれた社会とその敵』の草稿は，上・下巻それぞれ1942・43年に出来上がっていたことになっている。『歴史主義の貧困』の成立・出版事情に関しては，本稿の注(38)を参照。

(22) ポパーはゼロ方法の提唱の際に，ヤーコプ・マーシャクと彼のゼロ仮説（null hypothesis）に触れている。マーシャクが説明したのは，貨幣イルージョンに関するゼロ仮説を用いて，市場における一見すると非合理に見える行動であった。マーシャクの説明の目的は，合理的行動からの逸脱の原因としての貨幣イルージョンの数学的表現にあり，逸脱それ自体の観察方法の提唱にはなく，定量分析よりは定性分析にあるように思われる。実際にマーシャクが行ったのは，貨幣イルージョンという貨幣の特殊な機能を，ニューメレールとして商品一般に還元するのではなく，非還元的な独立した変数要素として，効用関数に取り入れることであった。科学哲学者ポパーのゼロ方法の説明に，経済学固有における，この種の非還元的な機能の説明までを，または定性分析と定量分析の明確な区別までを求めるのは，過度な要求となるであろう。この点については，Popper [1957] 141（邦訳）213ページと Marschak [1943] を参照。

(23) 方法論的多元主義については，本稿の注(3)を参照。

の実質的な違いがあるのか，やはり疑念が生じる。そこで，ゼロ方法を社会科学のための方法論として提唱する際に，それに関して承認しうる別名としてポパーが言及した，「複合的方法(compositive method)」についての，そして，この方法論をポパーに示唆したハイエクの主張についての，ゼロ方法を実証主義批判として補完するものとして，具体的な解明が待たれる。[24]

V．ポパーとハイエクをめぐって

実証主義の内在的批判という見地からなる，ポパーとハイエクに関する考察は，両者の関係についての論争を考慮して，その内実がより明瞭かつ豊かなものとなる。それは，ポパーの反証可能性の議論を，経済学者がどのように受け止めてきたかという問題であり，いわゆる「ハイエクの転換(transformation)」をめぐる論争である。ハイエクとポパーの関係を，反証可能性の議論への通常の解釈よりも，古典的な「帰納と演繹」の問題から眺め，この両者の親近性を図り直すべきとなる。

ポパーとハイエクの関係をめぐり，1980年代に論争が発した。口火を切ったのが，1930年代に経済学への論理実証主義の導入を試みた，他ならぬハチソンである。ハイエクの前期の著作における経済学方法論と，後期の著作におけるそれとが，「ハイエクⅠ・Ⅱ」と命名され，方法論的観点から見れば，これらは両立不可能とされた。ハイエク研究では今や周知となった，このハチソンの結論の要点は，ハイエクⅠは，同門のオーストリア学派の主にヴィーザーとミーゼスの影響下にあり，経済学理論体系における先験的な要素を強調し，理論と経験的事実との方法論的関係性を無視していたが，ハイエクⅡは，経済学における補助仮定に過ぎないとハチソンが見なした，一般均衡理論における前提としての「均衡への傾向」に対して，[25]経験的に正当化できないと懐疑を示したとされる。これをハチソンは，経済学方法論における経験的事実の重要性をハイエクが認め始めたとし，ここにポパーの反証可能性の議論の影響を読み込み，ハイエクは反証主義者へと転換したと結論した。[26]

これに対して，ハイエクは転換していないと，コールドウェルが異を唱えた。一般均衡理論における高度に抽象的な側面に関して，ハイエクが批判的ないし懐疑的なことは，前期の著作からも連

---

(24) ポパーの注によれば，複合的方法という言葉は，メンガーに従ってハイエクが展開したことに示唆を受けたとしている（Popper［1957］141（邦訳）213ページ）。実際にハイエクの注によると，この用語はメンガーから借用したと述べている（Hayek［1952］67（邦訳）51-52ページ）。

(25) 一般均衡理論へのハチソンの態度に関しては，本稿の注(8)を参照。経済学理論の経験的なテストに否定的な態度は，従来では「方法論的先験主義（methodological apriorism)」と一括されてきたが，一般均衡理論に対して一様な態度ではなく，むしろ鋭く対立しうる可能性について，ロビンズとミーゼスの方法論を比較したものとして，Nishimura［2002］を参照。

(26) ハイエクⅠ・Ⅱに関する説明は，Hutchison［1981］210-214, 214-219を，それぞれに参照。後期ハイエクを反証主義者とする，その他の論者の主張としては，Blaug［1980］50を参照。

続して読みとれると，コールドウェルは主張した。この観点からすれば，一貫してオーストリア学派の方法論的伝統の中に，ハイエクを位置付けることが可能であり，ポパーの影響による方法論上の転換はないと，ハチソンの結論が否定された。[27] さらに吟味されたのが，ハイエクの方法論的主張からの，ハチソンの引用の仕方である。ハチソンは，ハイエクが社会科学における予言の役割を肯定的に述べている部分を取り上げ，それを理由として，ハイエクは反証主義者に転換したと，結論を下したのであるが，コールドウェルは，ハイエクが意図したものは，従来のような単純な現象についての予言ではなく，複雑な現象に関する「類型予言（pattern prediction）」と呼ばれうるものであり，これはポパーの影響から全く独立であるとした。[28]

ハチソンとコールドウェルの論争を，注意深く読み返すと，次の二点が明確になる。

一般均衡理論に対する批判的な態度には，少なくとも二つの種類があり，これらは混同されるべきではない。演繹的であるという批判と，過度に抽象的であるという批判は，厳密な方法論的考察からすれば，異なるものである。高度に抽象的でありながら経験的でもある例として，今日では高度に実験技術が進歩した，量子力学などが挙げられる。ハチソンが指摘したように，一般均衡理論に対するハイエクの懐疑は，その著作の前期よりも後期において際立っている。問題となるのが，ハイエクの懐疑に対するハチソンの吟味である。経験的である現実的な問題を扱うには，一般均衡理論は過度に抽象的であるという言及が，経済学は演繹的であってはならず，経験的な予言を行う学問であるべきという主張へと，ハイエクの懐疑が読み替えられた可能性がある。つまり，1980年代におけるハチソンの反証主義に関する議論は，1930年代に自らが目指した検証主義に基づいている。

つまり，社会科学における予言一般に肯定的に触れている点のみが，経済学方法論における先験的な要素を強調する立場から，ポパーの影響によってハイエクは決別した，というハチソンの結論の理由となっている可能性が大きい。しかしながら，ハイエクの懐疑が意味したところは，ハチソンの解釈とは異なりうる。それは，「ある現象を生み出す原理の単なる説明」と「正確な結果を予言しうるような説明」の区別を，ハイエクが強調した際に表れている。

> ［ワルラスまたはパレートの］体系は，体系を構成している様々な型の商品の価格を統括する原理を示しているに過ぎない。しかしながら，この体系に現われるあらゆる定数の数値を知らなければ—そしてわれわれはそれを決して知ることはできないのであるが—どんな特定の変化によるものであれ，その正確な結果を予言することはできないのである。[29]

---

(27) Caldwell［1988］536-539

(28) Caldwell［1992］9-12

ハイエクが批判するのは，一般均衡理論そのものではなく，社会科学における説明のレヴェルの混同である。先験的な要素を過度に強調する経済学方法論から，特にミーゼスのそれから，ハチソンが述べたように，ハイエクは次第に距離を置いていったように見える。しかし，あくまでハイエクが主張するのは，実証主義者が追求するような正確な予言が，経済学においては成立しないことである。一般均衡理論は，経験的事実に対して，抽象的であるすぎるという主張は，経済学は，徹頭徹尾に帰納的な経験科学であるべきで，演繹的な要素は排除されるべきという主張までを，含意しない。かつてロビンズを過度な演繹法論者と見なしたハチソンの，過度な帰納法論者としての解釈に，ハイエクⅠ・Ⅱの議論は基づいている可能性が大きい。

第二点は，第一点の問題をさらに明らかにする。それはポパーの反証可能性の議論に関する解釈である。本稿の前節で述べたように，ポパーが反証という方法論を提唱したのは，帰納法の，特に検証主義の批判にあり，それにより明らかになったのが，反証可能性を備えた言明の全てが，予言を導き出すことが可能な法則言明ではないことである。社会科学における予言について肯定的に触れている点のみから，ハイエクが反証主義者へと転換したと，ハチソンのように読み取るのは，ポパーの反証可能性の議論に対して，少なくとも忠実とはいえず，むしろ強引にすら見える。つまり，ハチソンの主張が意味するところは，ハイエクが検証主義者に（反証主義者ではなく）転換した，というものである。この点では，社会科学における予言に関するハイエクの言及を，単純な現象への予言と，複雑な現象への類型予言に区別して読み取った，コールドウェルの方が，実は自らの結論である，ハイエクの方法論上におけるポパーからの独立性に反して，ハイエクとポパーの方法論的親近性を，示しているように思われる。論争相手のコールドウェルも，反証可能性を備えた言明は，予言を可能とする法則言明であると想定した上で，ハチソンに対して，ハイエクは反証主義者に転換していないと，反論したように思われる。

まとめなおすと，まず，ポパーの反証可能性の議論を，全ての科学的な言明が，予言を生み出す法則言明ではないと解釈する。そして，ハイエクの類型予言の意味するところを，特定の個体に関する予言ではなく，個体の特定のレヴェルに関する規則性への言明と解釈する。そうすれば，ハチソンのハイエクの解釈は，実は検証主義的であり，反証主義的ではないと，コールドウェルの立場を尊重しながら，批判することが可能である。(30)

このような論争の背景には，ポパーとハイエクの関係を，科学的方法論の観点から考察する際に，ポパーの反証可能性の議論を，カント的ないし新カント的に解釈する傾向がある。(31) 実際にポパー自身は，科学的方法論の解釈としての「仮説主義」を提唱し，反証可能性を備えた言明は，経験的事

(29) Hayek [1952] 74-75（邦訳）49ページ。この引用部分の最後には，ハイエク自身の注があり，パレートとクールノーを引用し，この両者は価格の数学的な計算可能性を目指して方程式体系を提唱したわけでないと，解釈して強調している。

実に対して総合的であると述べるときに，それをカント的に理解すべきではないと，注意を促している点が重要である。[32] カント的解釈とは，言明を分析的と総合的と二区分し，前者は，同語反復な命題であり，経験に先だって常に真であり，後者は，経験的事実に照らし合わせて，真偽が問えるというものである。ところがポパーは，科学的な言明それ自体が，次のような点で仮説にすぎないことを強調している。

> なんらかの対象について考える前に，その対象を見たり観察したりすることはできない……。なぜなら社会科学の大部分の諸対象……が，抽象的な諸対象であり，理論的な構成体（*theoretical* constructions）だからである。（強調は原文）[33]

すべての知識の源泉を経験に求める，ナイーヴな経験主義を批判しつつも，方法論的唯名主義（methodological nominalism）を，ポパーは自らの立場として徹底させる。事物の究極的な本質を探求する，方法論的本質主義（methodological essentialism）を，両者は否定するが，ポパーが例示するように，「戦争」や「軍隊」という単純明瞭な名辞ですら，経験のみを源泉としたものではなく，思考が介在した抽象的な概念であり，具体的にあるものは，「殺される多数の人間」や「制服に身を包んだ男女」などとなる。[34]

つまり，ポパーにとって理論における先験性とは，あくまでも抽象的な概念が経験に先立ってい

---

(30) ハイエクの類型予言を，計量経済学の観点から考察した場合，何らかの経験的な事実をパラメーターとして，モデルを組み立てテストする限り，完全な予言を提供し，反証されずに現存する計量モデルはないとして，ハイエクの類型予言とポパーの反証可能性の議論は，両立不可能とする論者もいる（Paqué［1990］）。しかしながら，反証可能性の議論にて，全ての科学的な言明が，特定の個体への予言を導く法則言明ではないと，ポパーが強調したことを考慮すれば，実証主義的な厳密な予言の失敗と，反証可能性の議論とが，両立する可能性は残っているといえる。この点に関しては，本稿の注(31)(32)(50)を参照。

(31) 従来オーストリア学派の，特にメンガーの方法論における先験的な概念（例えば欲望や効用など）を考察する際に，それをカント的な「分析と総合」または「アプリオリとアポステリオリ」の区別で理解するか，アリストテレスの本質主義で理解するかという観点で考察されてきた経緯がある。問題となるのは，このような考察枠組み自体ではなく，考察対象としてポパーとハイエクの関係性が扱えるかという点にある。また，メンガーの方法論がアリストテレス的かカント的であるかを問題にした邦語文献としては，武藤［1989］があげられる。同文献では，メンガーの方法論への解釈が，新カント派的観点に偏重した問題を取り上げ，もう一度カント的に読み返す作業により，アプリオリかつ総合的なものとして，メンガーの方法論を解釈している。

(32) Popper［1957］131-132, fn 2（邦訳）199-200ページの脚注(2)。この点では，本稿の注(19)を参照。また邦語文献において，帰納法批判としてのポパーの仮説主義に関する説明としては，小河原［1997］の82-86ページを参照。

(33) Popper［1957］135（邦訳）204ページ

(34) Popper［1957］135（邦訳）204ページ

るという意味であり，具体的な経験的な内容を欠いた仮説に過ぎないという意味であり，ゆえに，経験的な意味でも，まして先験的な意味でも，真偽を問うことができない，ということになろう。このような先験性への定義がなければ，トートロジーという，論理学におけるアプリオリな演繹的推論形式と，抽象的であるアプリオリな概念に基づいて構成されるが，経験的な事実に向けられた命題との区別が，つまり，演繹的なものと抽象的なものとの区別が困難となるであろう（先のハイエクの懐疑に対するハチソンの解釈もこの点で関係する[35]）。敷衍すれば，検証主義には，真である仮説はいつの日か経験的事実により究極的に正当化され，経験的に真なる内容を永久に持ちつづけるという，表向きは形而上学を批判しながらも，真理に関する究極性という形而上学的な概念を，何らかに前提としている可能性がありうる。一方の反証という手続きが強調するものは，仮説とは，テストされる際に，経験的内容を獲得し真偽を問えるが，テストが終われば，その真偽に関わらず，再び経験的内容を欠いた抽象的な概念に戻るという点であろう。仮説とは，いかに経験的に正当化されようと，究極的には正当化されないものである。

Ⅵ．ハイエク：実証主義（positivism）と複合主義（compositivism）

そこで，複合的方法という用語により，ハイエクが展開した社会科学に関する方法論の主張を，具体的に考察する必要が生じてくる[36]。実際に，ポパーもこの用語に触れているが，ポパーがそれを学んだのは，『歴史主義の貧困』の出版において惜しみない援助を行った，ウィーンを同郷とし異郷の地で学究を営む，他ならぬハイエクであり，それは，『科学における反革命』（1952年）において，社会科学のための方法論として展開されたものである。

そこで，『科学における反革命』と『歴史主義の貧困』に関する，執筆と出版についての事実関係である。前者の大部分が，1941年から45年にエコノミカ誌に，掲載されたのに対し，後者は，44年と45年に3回に分けて，多少遅れて同誌に発表された。ポパーはハイエクから積極的に引用しているが，逆からの引用は相対的に少ないものとなっている。例えば，「科学主義（scientism）」や「科学主義的（scientistic）」の用語を，ハイエクから示唆を受けたと，ポパーは認める[37]。この点か

---

(35) ハチソンによる経済学の純粋理論と応用理論の区別自体は，一見するとポパーの仮説主義と似ている（本稿の注(8)参照）。決定的な違いは，ハチソンは，演繹的推論形式のみを，先験的であると認め，ポパーが仮説の先験的な抽象性とするものを，考慮しないか積極的に認めない。

(36) ハイエクの複合的方法に触れた邦語文献としては，橋本［1991］があげられる。なお同文献は，ハイエクの方法論の自生的秩序論からの解明が目的であるが，結論部分にて，ハイエクはポパーのゼロ方法には否定的であったと示唆されている。ゼロ方法に関するポパー自身の説明は，社会科学に拡張し適用するには，不充分で曖昧な点があり，ハイエクの方法論とは，否定的な関係に見える点もある。しかしながら，ポパーがゼロ方法で社会科学のために目指したものを，ハイエクの複合的方法こそが補完するという可能性に，本稿の焦点はある。

ら見れば，ハイエクがポパーに対して影響を与えた印象が，前面に出てくる。しかしながら，『歴史主義の貧困』の序文における，ポパー自身の説明に拠れば，1930年代の後半にハイエク主催のセミナーにて，ポパーがすでに草稿を読んだことになっている。また，ポパーが，自然科学方法論への社会科学側の誤解の批判が目的であると，注意深く繰り返して述べ，社会科学固有の方法論的問題に関して述べる際に，頻繁にハイエクに言及している点を踏まえれば，両者の関係は，どちらかが継承したものというよりも，科学哲学者と経済学者が独自に考察を進め，結果として意図せざる形で，同種の主張による共同戦線を張ったように見えるというのが，妥当と思われる。(38)

『科学における反革命』は，前半は，社会科学方法論の一般的な考察であり，後半は，19世紀の実証主義の具体的な批判である。まず，科学主義という用語の意味するところを，ハイエクは明確にし，それを，自然科学方法論の社会科学への無批判的な適用とする。(39) そして着目されるのが，実証主義の逆説的な結末である。科学的な予言を追求すればするほど，ますます科学主義的な自然科学のナイーヴな模倣への，実証主義の転化である。ポパーが，反証可能性の議論へ，検証主義を置き換えることにより，全ての科学的な言明が，予言を導く法則言明ではないことを，明確にしようと試みたのに対し，ハイエクの主たる目的は，社会現象についての全体論的な説明の批判にあり，実証主義の哲学的ないし方法論的基礎の解明にあり，コントの実証主義が，具体的に取り上げられた。自然科学の特に生物学（biology）という方法を模倣し，自らの社会科学を社会学（sociology）として提唱した，コントの科学主義的な態度を，ハイエクは批判する。

そこで，問題となるのが，二つの実証主義の関係である。たしかに，ハイエクが主に触れるのは，コントという19世紀の実証主義であり，20世紀の論理実証主義ではない。この新しい実証主義は，古い実証主義と明確な接点は無く，謙虚な主張のみに止まり，科学的な方法論による社会改良や改革などを，決して目指さなかったとも言えるであろう。(40) 学問的な態度として眺めれば，新旧の実証主義は，断絶しているように見える。しかし，その理論的主張が方法論的に含意するものには，少なくとも連続性がありうる。論理実証主義を厳密に社会科学に適用しようとすれば，科学的言明と法則論的言明の混同と，意図せざる全体論的方法へのコミットメントの二点が，不可避なものとし

---

(37) ポパーのハイエクへの言及は多く見られるが，この点は Popper［1957］60（邦訳）97ページを参照。

(38) 『歴史主義の貧困』の成立と出版事情に関しては，ポパー自身が後年に詳しく説明している（Popper［1976］113-120（邦訳）下巻23-36ページ）。出版社を見つけることに，ポパーは困難であったが，ハイエクが，自ら代理編集者を務めるエコノミカ誌に掲載することで，積極的に協力した。それほどに会ったことのないハイエクに頼むのには，ポパーは気が引けていたらしい。ハイエクはその直後に，ニュージーランドで学究を営むポパーに，ロンドン大学の講師の地位を提示した。邦語文献としては，小河原［1997］の140-143ページを参照。

(39) Hayek［1952］24（邦訳）6-7ページ

(40) Hughes［1958］400-401（邦訳）270ページ

て登場する。これらは，ポパーが避けたものであり，実証主義の典型的特徴である「理性の濫用」として，ハイエクが批判するものである。新旧の実証主義における，学問的な態度よりも，方法論的含意としての共通点こそが，重要となる。(41)

したがって，複合的方法の一般的理論が述べられるのは，実証主義としての当初の目的から，コントがいかに矛盾した結果に至ったか，具体的に明らかにする考察の前段階となる。コントの目的とは，神学的または形而上学的な概念の助けなく，社会現象を「科学的」に説明することであった。この目的を遂行する手続きとして，動植物に関する明瞭な事実の観察により，生物学が学問的発展を果たしたように，社会現象に関する事実への，注意深い厳密な観察により，社会の発展法則が，科学的に解明されるとした。コントの社会学が前提としたものは，神学的と世俗的という二つの学問態度の区別であり，この二分法の是非は別として，当然に後者を徹底させることが，時代精神の先駆として，コントにとっての科学的なるものであっただろう。しかし，この帰結は，ハイエクが示すように，新しい神学的な概念の提唱であった。神に代わって，人間の「理性」を宗教的に奉仕し，超越的理性の能力を媒介として，社会全体に関する発展の法則を，コントは見出そうとした。(42)

そこで，ハイエクの提唱した複合的方法により，次の三点で，実証主義が抱える方法論的問題点が，明らかになり克服可能となる。

第一に，複合的方法は，社会現象に関する科学的な方法として，総合的（synthetic）である。それは，たとえ一見すると複雑に有機的に総合されていても，コントが考えたような全体論的（holistic）ではない。まず，確認すべきは，自然科学の方法が，決して全体論的でないことである。ハイエクは，全く未分析の現象に対して，ナイーヴな経験論者のように，普遍法則を直接に見つけ出そうとするのは，不可能な試みであると批判し，複雑な自然現象が，そのまま描写されているのではなく，いくつかの抽象的な構成要素へと推論されていることに注意を促し，自然科学の方法には，全体論的な意味付けという手続きはなく，むしろ，それが分析的（analytical）であることを強調する。抽象的な構成要素へと，自然現象を分析する知識の発見や発展なくして，科学的な理論は，存在不可能ということであろう。この点で，仮説における先験的な抽象性へのポパーの議論が補完され，ハイエクが述べる方法論上の分析と総合という区別と，カント的な認識論上の同様な区別とが，全く異なることは，もはや述べる必要はない。(43) コントの全体論的思考方法が，科学的では

---

(41) 政治的な態度から見た場合にも，共通点がありうる。経験的証拠による理論の「究極的」正当化という，論理実証主義者の願望を，本稿のII節で述べたような，高度に（不自然にすら見える）政治的な無関心さの，裏返しであるとするならば，コントも論理実証主義も同様に，自らが科学的と信奉する学問原理への帰依により，現実の政治的な混沌を超克（前者は明示的に後者は暗示的に）しようとしたと思われる。論理実証主義の社会思想的背景は，本稿の注(5)を参照。

(42) コントの全体論的性格に関する説明には，Hayek［1952］part II（邦訳）第二部を参照。コントの方法論とその社会思想的背景に関しては，本稿の注(4)を参照。

なく，形而上学的な科学主義であることを示すために，あるべき社会科学方法論の解釈として，ハイエクは複合的方法を次のように提示する。

> 社会科学の方法は構成的（compositive）あるいは総合的（synthetic）であると言えよう。いわゆる全体，または構造的に結合した諸要素の集合は観察される現象全体の中から選び出されたものであって，それは周知の性質を持った要素を一緒にして体系的に整合させたひとつの結果に過ぎない。そしてそれらはこれらの要素の既知の性質によって作り上げられたり再構成されたりしているのである。(44)

複合的方法とは，自然科学の方法と同様に，決して全体論的でないことが強調される。理論を通じて認識されるものは，一見すると一つの全体のようであるが，抽象的な構成要因を総合的に結びつけたものにすぎず，いかに完全に対応しているように見えても，具体的な観察対象の全体性からは，区別されるべきものとなる。対照的に，コントの社会学では，全体から切り離された個体は意味のないものと扱われ，抽象的な構成要素への分析という認識のための作業よりも，観察対象の全体性が優先され，全体という単一の要素によって，理論は現実と未分化なものとなる。自然科学においては，閉鎖され管理された実験が可能なケースが多く，観察対象となる現象の総体（totality）と，理論的に組み立てられた構成要因の総体とが，つまり，現実と理論とが，高度に一致しているように見え，一部の自然科学は，社会科学一般よりも，高度な予言に成功しているように見える。しかし，実験による閉鎖的管理条件という，あくまでも自然科学の一部に特殊な状況は，分析されていないそのままの観察対象の総体と，総合的に再構成された理論による認識の総体とが，完全に一致していることを意味しない。社会科学の方法論を考察すれば明らかであり，抽象的な諸要素により，総合的に構成された理論の総体は，自然科学と社会科学において，ハイエクが述べたように，常に，観察される具体的な現実の総体の，あくまでも選び取られた一部分に過ぎず，いかに高度な予言に成功しようが，観察される現象の，未分析なありのままの全体には，決してなり得ない。(45)

第二に，実証主義が陥りやすい全体論への危険性を，複合的方法はさらに明らかにしてくれる。総合的に組み立てられた構成要素の総体と，観察される現象の総体が，社会科学においてどのよう

---

(43) Hayek［1952］65-66（邦訳）43ページ。抽象的概念の先験性についてのポパーの議論は，本稿の注(33)(35)を参照。ハイエクとポパーの先験性の扱い方は，オーストリア学派の方法論的特徴である「内観（introspection）」の問題を考察する際に，重要な論点に今後なりうる。

(44) Hayek［1952］67（邦訳）43-44ページ

(45) ハイエクの後期の著作においても，同種の議論を見ることができる（Hayek［1967a］［1967b］［1978］）。これらの著作において，総合的に組み立てられた理論における複雑さと，一見すると複雑に見える未分析の観察対象との区別とが強調されている。

に異なるのか，経験的事実を異なる部類（class）に区別して，ハイエクは次のように明らかにする。

> われわれの研究対象となる人々が抱く見解と，これに対する我々の見解とを区別しなければならないという事実の結果であるとともに，われわれが対象とする人々自身が観念によって動機づけられるのみならず自らの行為の意図せざる結果についての観念をも同様にその人々が形づくるという事実の結果でもある。(46)

完全な予言を社会現象に関して追求するがゆえに，逆説的に実証主義が困難さを抱え込んだ理由が，観察対象としての事実の領域を，複数に差異化することにより，より明瞭なものとなる。ハイエクが述べるように，経験的事実には複数のクラスがありうる。人々を実際に行為に駆り立てるものと，意識的かどうかにかかわらず，その行為が結果としてもたらす副産物は，異なる事実のクラスに位置している（論敵であるケインズの「合成の誤謬」と興味深い親近性をハイエクはこの点で示す）。例えば，売上を増やす行為は，利益増に常に結びつくわけではない。利益増を目的としても，売上増加による供給過剰が低価格を導き，より少ない利益に甘んじることが多分にある。一つの行為とは，ある行為者が目的したことの結果のみならず，他の行為の原因ともなる。それは，いわゆるゲーム論で言われる「囚人のディレンマ」が表すように，他の行為との複合的な帰結をもたらし，社会的関連性に応じて，行為者が当初の意図した結果に対し，意図せざる形で影響する。(47) 実証主義は，経験的事実を一元的に扱い，ハイエクが区分した，事実における異なるクラスを，経験的な事実としての意図せざる結果が属するクラスを，考慮外においてしまう。(48)

第三に，観察対象となる経験的事実を，複数のクラスに差異化することにより，単なる物理的な記述では決してあらわれてこない，「意味」という次元の理解が可能となる。それは，ポパーによる科学的言明と法則論的言明の区別と同様に，全ての理解可能（understandable）なものが，予言可能（predictable）なものではないことである。未踏の荒地に道が形成される仕方を例として，これらの区別を次のように，ハイエクは明瞭に行う。

> 最初は誰もが自分にとって最良と思われる小道を自分のために捜し求める。だがこうした小道がいったん利用されるようになると，それによってそこは通り易くなり，したがってその小道

---

(46) Hayek［1952］62（邦訳）40-41ページ

(47) 量子力学で扱われる原子の連鎖反応と，これは混同されるべきでない。ある行為の結果が，他の行為の原因となるという主張と，一定の機械的連鎖反応として，それらは一元的に記述可能であるという主張とは，前者が後者の必要条件の関係にすぎない。

(48) 後にハイエクは（Hayek［1967a］［1967b］［1978］），この種の事実に関する二元的アプローチは，複雑な現象に対して多元的に拡張できると示唆している。

は幾度も利用されるようになる。こうして次第によりはっきりした小道が出来上がり，他に考えられる道を避けてもっぱらこの小道だけが利用されるようになる。[49]

最も利用される道を予言するならば，非常に困難な課題に，実証主義者は直面する。考慮しなければならないものは，実際に使用される全ての小道であり，それらには，予言する将来時点までに起こりうる，誤って踏んでしまったが，結果として人々に好まれ使われる小道までが含まれる。将来起こりうる誤りまでを，関連する事実として考慮に入れるならば，実証主義者自体が，その計算過程において，一切の誤りをしないことが，必須の前提となる。このような無謬への衝動こそが，神の概念に代えて，科学主義的に全知な人間理性の崇拝を，コントに促したのであろう。いかに注意深く既存の小道を観察しても，法則言明を見出し，意図せざる結果としてあらわれる，最も大きな道の予言を導き出すことは，不可能に近い。ポパーが述べたように，特定の毛虫へのどんなに注意深い観察も，その蝶への変態の時期の予言に結びつかない。社会科学においては，観察対象における累積的な結果として，行為者の錯誤や予想外の結果という，意図せざる帰結こそが，考慮されなければならない。例えば，貨幣や言語の進化的発展に関して，それらのプロセスを理解することは，比較的に可能であるが，それらについての法則言明と予言は，不可能に近い。次の世紀にどの通貨やどの言語が，最も有力であるか法則言明により予言することは，非常に困難であっても，例えば，米ドルや商業英語が，特定の地域で支配的になったプロセスの理解は，それほどに困難なものではない。

Ⅶ．結論：実証主義と複合的方法の要約

複合的方法が，実証主義と，特に強い実証主義と，鋭く対立していることが，以下の点でまとめられる。

理論における抽象的な総体と，観察対象となる具体的な事実の総体を，実証主義は区別しようとしない。理論と現実は不可分とされ，全体という単一の要素で構成されている。また，実証主義は，考察対象となる事実を，複数のクラスに分けることなく，ゆえに，理解可能なものと，予言可能なものとを，区別しない。さらに，方法論として検証主義に固執するならば，主張する言明を科学的と確証するためには，際限なく全ての経験的証拠を，集めなければならない。対照的に，複合的方法は，理論を，抽象的なものとして，構成要素の総合的な組み立てと捉え，一見すると複雑に有機的に総合されていても，それが具体的な経験事実の総体とは，全体論的に一致しないことに，注意を促す。複数のクラスへの経験的事実の差異化により，全ての理解可能な観察対象が，予言可能な

(49) Hayek [1952] 70（邦訳）46ページ

ものではないことを，複合的方法は説明できる。さらに，経験に先立って抽象的に構成されているという意味で，科学的言明それ自体は仮説に過ぎず，それら全てが予言を可能とする法則言明でないことを，反証可能性の議論が明らかにした点で，仮説が総合的であることと，反証可能性を備えていることは，両立可能であり，まさに，ポパーがゼロ方法で意図したものを，ハイエクの複合的方法が明瞭に補完する。[50]

複合的方法は，厳密な予言を目的とした手法ではなく，複雑な社会現象を理解可能とする方法論として，経済学一般に対する指針となりえよう。冒頭で述べた，ハイエクの先駆的業績への注目が，トレンドとして意味するところであろう。科学的方法論という観点から，ポパーのハイエクへの影響の有無が語られてきたが，社会科学の方法という観点から眺めると，ハイエクこそがポパーを補完する関係にあるという可能性が，ハイエクの転換問題そのものが転換しうる可能性が，明らかになった。

（経済学研究科後期博士課程）

---

(50) 草稿段階での発表で，福岡正夫名誉教授から，総合的と反証可能性は両立不可能でないのかという，疑問が提示された。この点を省みて，本稿の焦点は，オーストリア学派の方法論への，新カント派的な認識論上の用語を基準とした，従来の評価とは異なり，科学的方法論として演繹的な側面に肯定的という，ハイエクとポパーの共通点にあることを明確にした。ポパー自身が主張するように，検証主義的な帰納法への批判としての，反証可能性の議論を，科学的な言明とは，反証されずに残っても，依然として演繹的な仮説にすぎない，と解釈し（本稿の注(32)参照），ハイエク自身が，方法論的全体論の批判として，総合的と述べるときに，経済学方法論における演繹的な側面を，示しているならば（Hayek [1952] 72-73（邦訳）47-48ページと本稿の注(43)参照），総合的と反証可能性は両立可能という立場をとった。この点では，実証主義（positivism）とは対照的に，経験事実に対する演繹的な知識のネガティヴ・アプローチという，否定主義（negativism）が，共通する特徴として，改めて強調されうる。ハイエクが，『科学における反革命』において，「われわれはある種の諸現象を生み出す原理は説明できる。また，その知識からある種の結果，例えばある複数の出来事がともに起こるという結果の可能性を排除することができるのだが，われわれの知識は否定的なものでしかないであろう。すなわちその知識というものは，ある種の諸結果を起こらないものとして排除しうるだけで，様々な可能性の範囲を十分に狭めて，ただ一つの可能性だけが残る，といったことをわれわれに行わせはしないのである。」と述べたことを，実際にポパーは引用し，これが自然科学の方法をも完全に叙述していると，賞賛している（Popper [1957] 139（邦訳）209-210ページ）。肯定的（positive）な特定の現象の予言にではなく，否定的（negative）な不特定の経験的事実という補集合への言及可能性にこそ，仮説というものの科学性があるとすれば，ハイエクの総合的という主張と，ポパーの反証可能性の議論は，両立可能であると思われる。この点に関しては，本稿の注(30)(31)(32)(35)(43)を参照。

参 考 文 献

アリストテレス『ニコマコス倫理学』（上巻）岩波文庫1971年

Blaug, Mark. [1980] *The Methodology of Economics: Or How Economists Explain*. Cambridge: Cambridge University Press.

Caldwell, B. J. [1982] *Beyond Positivism: Economic Methodology in the Twentieth Century*. London: George Allen & Unwin.（監訳）堀田一膳・渡辺直樹『実証主義を超えて』中央経済社1989年

—— [1988] 'Hayek's Transformation'. *History of Political Economy* 20: 513-541.

—— [1992] 'Hayek the Falsificationist?'. *Research in the History of Economic Thought and Methodology* 10: 1-15.

Colander, David. [2000] 'A Thumbnail Sketch of the History of Thought from a Complexity Perspective'. *Complexity and the History of Economic Thought: Selected Papers from the History of Economics Society Conference*. Ed. David Colander. London: Routledge.

橋本努 [1991]「ハイエクの迷宮：方法論的転換問題」『現代思想』vol. 19-12：160-179ページ

Hayek, F. A. [1952] *The Counter-Revolution of Science*. Glencoe: The Free Press.（邦訳）佐藤茂行訳『科学における反革命』木鐸社1979年

—— [1967a] 'The Theory of Complex Phenomena'. *Studies in Philosophy, Politics, and Economics*. F. A. Hayek. London: Routledge & Keagan Paul.

—— [1967b] 'Notes on the Evolution of Systems of Rules of Conduct'. *Studies in Philosophy, Politics, and Economics*. F. A. Hayek. London: Routledge & Keagan Paul.

—— [1978] 'The Confusion of Language in Political Thought'. *New Studies in Philosophy, Politics, and the History of Ideas*. F. A. Hayek. Chicago: University of Chicago Press.

Hughes, H. S. [1958] *Consciousness and Society: The Reorientation of European Social Thought, 1890-1930*. New York: Knopf.（邦訳）生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房1970年

Hutchison, T. W. [1938] *The Significance and Basic Postulates of Economic Theory*. London: Macmillan.

—— [1981] *The Politics and Philosophy of Economics: Marxians, Keynesians and Austrians*. Oxford: Basil Blackwell.

小河原誠 [1997]『ポパー——批判的合理主義』講談社

Marschak, Jacob. [1950] 'Money Illusion and Demand Analysis'. *Review of Economics Statistics* vol. XXV: 40-48.

武藤功 [1989]「メンガー『国民経済学原理』の哲学的基礎」『三田学会雑誌』81巻4号：121-141ページ

Nishimura, Takashi. [2002] 'Rationality and the Consistency of Preferences: Robbins's Distancing from Mises'.『経済学史学会年報』第41号：15-24ページ

Paqué, Karl-Heinz. [1990] 'Pattern Predictions in Economics: Hayek's Methodology of the Social Sciences Revisited'. *History of Political Economy* 22.2: 281-294.

Popper, K. R. [1950] *The Open Society and its Enemies Vol. I & II*. Rev. ed. Princeton: Princeton University Press.（邦訳）内田詔夫・小河原誠訳『開かれた社会とその敵』（上下巻）未来社1980年

—— [1957] *The Poverty of Historicism*. London: Routledge.（邦訳）久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論社1961年

—— [1972a] 'Of Clouds and Clocks: An Approach to the Problem of Rationality and the Freedom of Man'. *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*. K. R. Popper. Oxford: Oxford University Press.（邦訳）森博訳『客観的知識』（第7章）木鐸社1974年

—— [1972b] 'Philosophical Comments on Tarski's Theory of Truth'. *Objective Knowledge: An Evolutionary Approach*. K. R. Popper. Oxford: Oxford University Press.（邦訳）森博訳『客観的知

識』（第９章）木鐸社1974年
—— [1976] *Unended Quest*. Oxford: Oxford University Press.（邦訳）森博訳『果てしなき探求』岩波（同時代ライブラリー）1995年
Smith, Barry. [1987] 'Austrian Origins of Logical Positivism'. *Logical Positivism in Perspectives: Essays on 'Language, Truth, and Logic'*. Ed. Barry Gower. London: Croom Helm.
Tarski, Alfred. [1952] 'The Semantic Conception of Truth'. *Semantics and the Philosophy of Language*. Ed. Leonard Linsky. Illinois: University of Illinois Press.
Wernick, Andrew. [2001] *Auguste Comte and the Religion of Humanity*. Cambridge: Cambridge University Press.
Wible, James. [2000] 'What is Complexity?'. *Complexity and the History of Economic Thought: Selected Papers from the History of Economics Society Conference*. Ed. David Colander. London: Routledge.